

平成 28 年度 前期日程

「小論文（国際学部国際社会学科）」出題の意図

この課題文は、核廃棄物処理場の受け入れをめぐるスイスのある村の事例を通して、リスクのある施設（いわゆる「迷惑施設」）を受け入れる地域の公共心と受け入れを求める側のあり方を考える問題である。単に抽象的に論じるのではなく、日本の実際の問題を念頭に置きながら論じることが求められる。

要約にあたっては、「有償より無償で核廃棄物を受け入れようとする人が多いのはなぜか」という疑問に対して、市民としての問題が金銭の問題に変質してしまうことへの反発、市場の規範の侵入により市民としての義務感が締め出されてしまうことをまず述べて欲しい。また、行政の高圧的な統制は、公共心を腐敗させることがあり、市民参加や市民の権利の重要性も押さえる必要がある。その上で、公共的な損害や不都合の補償としては、個人でもらう現金より公共財のほうがふさわしく、それは市民の負担と犠牲の分担に感謝の意を表するものであるという点も加えて欲しい。

自分の考えを述べるにあたっては、原発（再稼働）、基地、ゴミ焼却場、刑務所など日本でも社会的に問題になっている例に言及しながら（個別的な事例を挙げることは求めない）、迷惑施設を受忍する地域の市民の公共心は、どのような条件の下で形成されるのか、そしてそのために政治・行政や国民全体は、どうすればよいのかを考えて欲しい。国民の義務だからという単純な考えだけでは評価できない。課題文にもあった市民の参加・権利を認めた上での開かれた実質的な行政とのコミュニケーション・プロセス、公正で独立した第3者委員会の知見の活用、国民全体で議論するという国民全体の当事者意識と受け入れ地域への感謝などについて、指摘、考察しているかどうか、評価の重要なポイントとなろう。

出典：マイケル・サンデル（鬼澤忍訳）『それをお金で買いますか——市場主義の限界』（pp. 167-171、早川書房、2014年）

以上

平成 28 年度 前期日程

「小論文（国際学部国際文化学科）」出題の意図

課題文は、日本の著名な知識人を対比することで、日本の近代化の課題が、西欧起源の合理的でグローバルな近代と、日本的な伝統への愛着の間で、折り合いをつけなければならないことを、指摘したものである。著者は、日本の伝統と西欧近代を「二世」として対比し、福沢諭吉や新渡戸稲造らが提唱した近代化の促進を「二世を経る」、柳田國男や夏目漱石が模索した西欧近代と日本的伝統の調停を「二世を生きる」と表現し、柳田や夏目が読者と同じ課題を模索する同時代人であるとする。

本問題は、課題文を理解したうえで、解答者自身が経験した近代と伝統、グローバル化と日本文化の関係を考察することを求めている。求められることは、近代化・グローバル化と伝統・自文化に関する自らの経験を羅列することではなく、自らの経験にもとづく具体的な事象・事例を、文化の違いや、社会的脈絡の違いを踏まえ、論じることである。採点では、課題文を適切に要約・引用しているか、自らの経験、知識から適切な具体例、出来事を紹介しているか、また自らの考えを論理的、客観的に提示しているかが重視される。

出典：船曳建夫編著『柳田国男』（pp. 3-5、筑摩書房、2000年）

以上